へ 5
6606
1

南勢菊所標註

梅室附合集

東都 金華堂梓

へ5 6606

<2000-297>

はいかいはいかなる哉止ことゝみつゝらんきまゝ
世すちに三四十年よくよく得る事を形まる
吾友梅室のおもかげの心に偲ひて
集めの杖を求めし月のゆにあそぶ
つらゝふ結にやあるを編しもてまた人を
くまふよらんとしゆゑあるかなこと
そつきまゝは道をふてしかるに毎にもみえて

早稲田大学図書
早稲田大学教育学部図書
60438

いらくは無益長く侍るべしとかくと
筆にまかせて書出し言葉に臨して
いとしく徒然の句読めなるはあらねど
殊にかくして来て学びける人の鏡ともなるべくの
学ぶ身に猶ある八我るも意所のしばかりめ
心のつれづれ書きつけしも時のまなり
行さき人まめに道に物なりて

師をとし言ず道に学ぶ事あるべし
おのれも何か後に師たる人の
ひとつ所望をふかくあんじや侍るは為
老いたり師に重ねて西まで帰るする
おのれもそを東の方へ下り侍るを
さりとて書き学ぶ身の事となりて
似るかたの無形しるなかのよろしきあの

寐てもさめてもしき露さへ世にも捨
られぬ道の深きを知るものは
す翁ひとりしき此編者の身すから
めでたくし我かの秋の初め定も石川の
宅にある宅に集まりおいてもかしきき筆を
とりてつゞくる　　　同書
八十老人［花押］

凡例

一 大人の句続唱ハ何れも何れもの
やまかく技芸をさし雲傍曼を乃
功もく添て寸法を以て其の法のとくもいて
その任にあらん志かハあれと大人門中
日頃の世をもかしもらん又ハとかくのことくなす
同随の縁を志て志ひとりの筆を
とりぬ大人のりんまさんかきかりぬ西
そなむのあらみ遊し

一　篇獄より末の句まで故ありある句
ともあそびのこと標出して著葉に
作りぬ素より常学にして詞拙く
意明らかならねは世の稽乃ちも多
かるべし尚今に見ん人の眼に
あらんかし

一　箋注訓釈の和漢経籍を考へしかとも
文多し詞の長きをいとひさらさるを
つゞめて序に記し略せんなり

一　発句作者の名を記さず附句を
大人の句なり

一　附句月並無混雑の部に二句一聯
なるを二句とも名を記さぬは悉く
其句を他乃作なく撰句ハ大人乃
句なり

一　数句標出し作者乃名録
記さゞるを大人の句なりも

一　附句その時々年月次第にかきたる

さまさまありて此度の随筆なれは
なる事
一此集大人の句稿を急きされは十句の
工拙なし編なし

菊所

蛙 本字鼃
漢名未詳

梅室大人附句抜萃上巻

勢南 菊所 編輯

服の部

庵の猫たのむ隣ともうらみの 桐石
まさ乃小ゆをまゝしるなの茎
聴く柳の下や掛ひらち 音人
古川桂ゆきしこ田の庭
たし見るせるてあれこて柳なれ 禾菜
いか川のおしくゝ鶯のなく数

地錦(ツタ)

キサラキ二月ノ異名氣更ニ来ル義

丹波

今ウクヒスト呼モノハ漢名栄鶻鴒

春の山十日くの寒さうかれ　春枝

春風に吹かれる枯葉乃恵

霜まで深く八重にし霧めい八帰る雁　蓑風

小松吹きの北なかくも如月

物ぞや生垂のきえきると松　暁揚

人霧ぞりし人のまたきる

春の風になく鶯乃声風　一蕙

春雨ぬる漆柳に内ふ

卯月ハ卯花月ノ略又周正ノ四月卯ニ當ルヲ假リ用ユト云リ共ニ的當トシカタシ

花うへやきのふさしこる出さくて　一嘯

まつちりに日乃峰ま雲

花咲くかきりの流くや山の奥　楽水

入りの流は千鳥ふる雉子

鶯の声ら出るる卯月乃那　雲擧

衣の垣ましまちのき雲豹

ふる川まて山まあまりぬ時鳥　白桂

空の晴よちのく落るけふの葉

鷗ノ属ニテ漢名未詳

秧雞

秧

棟花

汐先やさつほとゝ哉部鳥
藻るさゝらに井絶し田　林曹

秋をうしや更さゝめく鳴る鷄
合歓のちゝみを吹入る窓　大梅

もとふとくもかゝる牡丹哉
いろ葉の雨に流るゝ棟干　素共

あめりくと洗ひ上てる茶哉
楝の花九ゝ咲くにあるし　袁丁

近江湖水晴テ吹ヲ日アラシト云

蒲黄（カマノホ）

罌子粟

豉醬

さひしさにかぬ蚊をたちきんさ
庇の下干し並ふ蒲乃穂　挹く

一もとく芥子蒔うけや風渡り
芦梅志ならしふ夏乃露　挹く

めらかなる葉ありはあかるゝり
花に吹りをう引き露　南宗

見ると浅い夜うふみ鳴るに哉
夢よ雨乃流む柳橋　禾薬

白頭翁

秋さひしく菩られ八月の法に見ゆる　久臧
粟刈もこの里惑る　細橋
法の影月も七里よ十三里　其一
居まりさまさ鶉も鳴きもち
志らく〳〵と梅のしや宿の秋　禾楽
離法くも八声か志る月
降出して秋は入雲の干潟かな　一貝
蝸も木そく並して冬の空

竹庵宇治茶師
上林氏

八月仮式ニ駒迎アリ諸國ノ牧ヨリ牽来ル駒ヲ逢坂ニテ迎ルヲ云
波雨
火籠

服并弟三の部

いつも法の〳〵桜の紫まるま　芝九
棟の日常を志きしかり法く
非居う嬉姫の白ひ川ことく
寂伏のありくえくまき毛く秋　禾楽
山辛くさを渡る三日月の照
弱寒の宇路いさむ朝〳〵ま
人のいふ扉の奔りや行時雨　呆とお
雲桶干せを猿しむ山の猪

檪骨（トゲ）
富士六帖ニ不二一統志ニ不盡ニ作ル

檪の刺をもいとへ羽織かな　芳笠
眠られぬの不二をも小笠の名残
古川をとりみ舟のまくらき
新しくとまる池の垢らむあさして

第三の部

芳ふくの名ハ菊千代の業　文洲
掃溜ちる人東風の吹出し　雲帝
梅緒を一日とまぬ初市千
芳もあまれる縁な代

蔵前ニ住若村アリ豊太閤所扶持ニ幸若太夫生縁

鷹ニ白キ尾ヲツゲハ雪アル心ニテ春ヲ忘ルヽナリ故ニ春白尾ヲ継コアリ

鳥銃
天文十二年八月大隅種子島ニ南蛮商船漂着ス其中ニ鳥

霞もきのふ乃箱に　九六
筆置かぬ里を柳よ見えざらく
暮らし人家かされるまゝぬ年
きのふもそよも霞む山乃末　鷺鳴
人中よ鶴尾の舞ぬ月よ立ちく
来る人流れて流れぬ春の乃え
紅のちかりハ堕なそら
鉄砲の響き古城から梅咲く　霞畦
翠まやりとれてもありの鶏の声

銃ニヲ載来ル
数年ヲ経製シ
習ヒテ國中ニヒ
ロマレリ

霞

桜のあはひにくもりとなりし空　木積
鉾初に揃ふ人牛茂れ哉こゝろゆく

宵ゆや日当て揃ふ人穿つ吟のゑ　康当
新かきらす畑の芽れ芽

浅きさ山の雄鳥子春を啼く

雲かゝる野のしみある堤沢　田花
たかもえくりと新田の春

夢塚に埋める桜さらりけく

よろなくて門を揃ふ人家壁

厳さうへ家が確个乃月　鷺流
升床の雄吠えるゑく

頭巾とれ赤の木比目八ゑくとも　大梅
さらさらよう川る山のさみをり

月明り田をよく一るをこらへさ　一葉

晩る雲と暮れ比ゆきく　呼朱
桑のさくれやつせなさ私

浅き場名切の塵に宇
晩とそら又朱ゝのくもの晩き

荷兮句
千句イト去
北山ノ寺

凌疏

盟麥

はるさめにゆかりをまつ門　雪中

山寺のかねをきゝて待居く
悼なきあり

卯の花や蔦からまれる釣のくゝ　蒙堂

短夜やうつる露の光しく　雲帆

昔ゝのくく蝙蝠まつる蓮庭

五月雨や牛のなくさも十日あり

あらしふくあらし蓮の搓る　有涯

せきれいと嘘家の客かりて

みじかしやあさく深き水の行

宗次蕉翁時人
ミフクニ子レハ
麻シキユフヘカナ
世俳ニ此句ヲ傳
○此句去來集ニモ
見ユ作者是カタシ

角力ふるまひ麦乃刈への手　心非

白髪も植そこね経ハ猫しくく

藤の上をうきくさ流もかり　蓬流

会詠ちかそむる里乃橋つらん　拯之

此振に露きゝし鐘を換えまく

蛸つまハ堀も蘭もしる月のかね

ひとつ轉くる門乃涼風　古錢

扨けの宗次か其を洗ハきく

世の縁義ふ涼しき柱ありける

中右記保延元年九月十三夜鳥羽法皇明月無双之由被仰出ト見エタリ

鶉

鯇魚

残り少く世の中乃月　寥哉

草むらの動くさ蟋の細き声

なく蟲や露のこぼるゝ竹のかげ

萩に止るや萩にまかる風　眉岳

浜車秋の狩を引かるゝ

涼しさや見る月出より十三夜

垣に明かしつゝ竹　孝也

御物の江鯇の切口あきぬなん

小さき鳥の巻や堀の外　寥哩

温泉ハ地中ノ火地中ノ水脉ニ交會スルモノ地上ニ発越スルナリト稲若水ノ考ヲ引テ香川太冲云リ

下かゝるさくたひしく乃影　松堂

船切てひらく投る月影新

より傳ふる萩の葉の露　岸蘿

鮎の別れつくまゝ波垣

温泉の流れ逆に流る汐さして

赤きや一宵廣き色　太猿

澤の細き空に錦かな　一具

磨きや若竹の川の蝉鳴く

鉄砲

打鴨

足中まで濡に踏る時雨哉　大梅
笠の音乃やみきゑをきらん　守節
さいほとふくなりき都鳥
雨を雨と思はぬ形の小鴨哉　呈売
あしたま踏る氷乃埋出　二哉
穐風も二本の杉をめぐりけり
吹きるゝ不二の雲をさしそへ　一背
氷の仕舞をうつる音のし　大梅
緑代まつくさ秋ともる旅さしそへ

游絲

攆ハ史記夏本紀泥行乗攆ト云ハソリナリ カンジキハ釘鞻

蓮戸を吹きしも沖乃鴨
そゞ菜をくる郡れもてのし　禾木
樏とこゝの木の枝をたわむらん

荷四方面の歌

梅咲や旅人山へのけのぼる
ゐよりかゝれる風乃音哉　禾叢
経糸を繰らせる蓮引かけて　仝
楊あつける嶺を高添ゝ
梅とめつ吹くともつく笠乃月
うるほ花七未しぶりの飛光るを

海蘊

櫨子

弓神代紀
御弓ヲ彎ケ振起シ
弓彇ヲ振起ト
アリ

網をとハらのかゝ青柳　三岳
あらせ乃浦に海蘊のこれ細く　仝
緒なのかゝる葉もなし
ふもしく藻に隠る月の露

ゐらたて張くまゝ如く其好みに　梅渓
本弭の筈もさゝる山乃入口
弓をひんぬも引しほりを試さく　一脊
月の見ゆるも八幡なく鶴
まるしうしま芸を刈らしく露
蓬く乃素る乃ともり　萬所

鱠残魚

筍

白魚乃奥くさくなゆる笹干く　仝
上張るく人乃芸巾し
花もなき月くん鰹す草畑
久しゝや雪ら如くあらき時雨
ふ數さらしも旅乃秋のあと　文游
一里まて屋根の色とくに草種さ　仝
御を洗ふも紬り輪むくを
さめも下乃七日八くまこの月
竹の子や星去落る秋の声
蚊まのあせ乃なる月代　望揚

み橋のむかふまでに見えぬく　芋也
扇に揃ひと相似たくなる

親に似く鮎は流るゝ落ち鮎
小菜売りのこゝる山畑　一嘯
井戸ちかく風呂場の口を附くて　仝
上下とめ干はゝてつきまとも
浪ゆたかなく毛果ある海の上

ゆるく千米を買ふ鯨の秋
る勢ゆく水あふるまゝに戸　永篁
状使人よりまへ浴さく　仝

鯾魚

蝦虎魚

大化二年開塞防人ヲ置ト書紀ニ見エタリ

小がめけの有らんまゝなりも
壇とめの磨くとみにうつく　鯰

三日月のあらしや揺るゝ日の影
ゆらやくくと鳴るかみ　虫　介立
消炭の火にあふのくる鯊(ハゼ)痩せく　霞所
山とゝるかとかりすき生まよふり

月の霊賭あふしまる筆るる代
岬(ミサキ)に松乃ならの秋風　一肯
筆あるの鼓出とを画に揺千く　仝
揺ゆく魚をとてあはれしるゝ

以まゝら窓しくと百も以よ　　仝

松風八大まへくなるの月　　斑(?)

芦ふも松生を落つる流寓

竹窓を出つゝも楚ぬ物屋ふ　　十丈

乳のたる一寸を送らせけり

咲とめるたびよ赤さく花ぬ

色も払ろさぬ漂ふ月　　露山

石ふ音よ明を蛍を落る謡ふそ　　采

徒いの中下ゆらも殺し

尾張

越前産

戸口から今にの蔭え高もとき　　北帝

日まとかや?さ月乃細ら筆

宮ありをのけかを?る?ぬ?よ　　仝

隣かと二人旅法ひ?る

長鼓鳴らしても夜も東乃為

菜?や?を見せる富?屋　　昆(?)

草?の?に?たりても積母(?)

月の?たる木の手よ張ろけり　　仝

?の青を崩?ら?問よ

烈?織をかいつくらかく夕涼

烟草慶長十年外國ヨリ渡ス漳州府志淡婆姑ト出タリ

莨

濃ゆき人をとめしかやむ姑
たはこの煙乃たなびく月影　楽乎
秋深く桐の木柳に名のりけり　仝
笹ぬれてもちを仕込める
狂やうかに程なく露

線よつむ落葉も芽や出るの丘
燒の煙る庵乃埋火　亭池
大根を縄ににくせハ假粉に　秉木
海士の向もぬ孫あらしの風

レシ鴨ハ小鴨ノ事前見

禮投壺第四十肥後熊耳先生曽テ伊勢ニ来リ投壺ノ禮ヲ傳フ

青魚

さのこしのはな杉蔵る岩に若水　沙路
鷺の前餌にまよふあし鴨
丸し笑れ袖をもつれて跳りなき
身の讀まれて扇なくしけり　南店
飛さつ紀の膝枕なりぬ鶉鶉
志川の笑けハ流る柴橋　林曹
夜風身をまかせつ壺に矢を投く　仝
志らの葉乃芽も今し青む
柱かけて挽ひ集る木の草履

月の部

洛東銀閣寺ノ後如意嶽ニアリ

薄(ススキ)まれし柳の梢を洗しかり
大文字山九ノ引接の月
芋を上るよ稀る乙乃子
去の月近江たつまよたてしき
蛻の殻しぬ一ともを自慢ふ云ふて
素八句よ祢衣色ね月
千川しら蛇まりの袖ふ収るよ
大茶子小茶らるよ濁(ニゴリ)く

友泉画師京祇園町ニ住ス画ク所ヲ摸シテ深ク又タル友泉涂ト云異本友禪ニ作ル
柔術拳法ト云手搏ト云福野磯目三浦ノ三士大明陳元贇ニ遇シ柔術一端ヲ聞テ各自其枝ヲ得タリ元贇ハ深艸元政ト知音ニテ元ゝ唱和集アリ
春時早ク筍ヲ生スルヲ孟宗竹ト呼ハ晋孟宗雪中筍ヲ得タル故事ニヨレリ漢名江南竹
連歌師宗鑑俗称支那弥三郎城山崎ニ住スルヲ

桐の葉ふ日をの影を見たるかな
友禄汁のもみきりし月
菓の手たつをもまつくく　廣庵
柔術とるるふよ藝あき月の友
萬漫見流み篝の礼つさく
塚よ堂見八ましく見ゆる月
連歌師をさくしす　藪山
宗鑑ら影あるさくの月

以テ山崎宗鑑ト呼

金琵琶

井のとやまた萬字 葉乃落葉
要月二十八日 秋 月
そのみことねき 秋むしの縁
これ月のおとハ寒きより秋くらし
小坂ハの宿や歩とくさ 松の緑
さ絵八信濃八月 雪乃国
縁の法度乃清くさくらも
十五夜ハ嵐も時ぐまそ八百の月

北条實時鎌倉稱名寺ヲ創造ス法号稱名寺殿ト云

大八ハ車輪ニ八輻アルヲ云大ナルヲ大八ト云小ナルヲ小八ト云

近江

大津絵始リ浮世又平書始ト云ヘトモ証ナシ蕉翁ノ句ニ據レハ元禄比佛絵専ラ書シト見エタリ

塚

余流より八幡のちかいさき 称名寺
みへく月さ法 桐乃る乃
彩應なる年 捲し 大八
車ゟや 廿六夜乃 雲の月
大津絵の阿弥陀歩く是りの程
猶ふとやく さとハ越し 月
山のことふくふ 栗 餅 を 賣
ここ月よ二つ鐵くる一里塚

山城

玄賓僧都備中湯川寺ニアリテ山田ヲ守リ鳥雀ヲ驚カシ民ノ苦ミヲタスク世ニ山田僧都ト云

山田守の稲田によそに押さるゝ
暈ありて照らす秋の月
小田守る身世の為に働りくさ
晴くもる月に数多を甚しく化く

甲斐宿驛名

摂津西国ノ大道民屋並ヲタゝル八里内裏遺阯一リトソ

韮崎を露方の葉に宿りる里
おんのり有の照る朱乃鍋
うそのさるゝ笠ぬうつり出
涼風 薹へさし入る月に風そよく

胡枝子花

蕉翁羽日光山下ニ宿ス主ヲ佛五左衛門ト云性質正直ナル故自然此称ヲ得タリ奥細道ニ出

勇めるの体をまつとのゝあわ
月と萩とそらつて掛茶屋
登のぼりを叩くまそそ
月さしく佛にもえたる五左衛門
豆それハ文綴にまきる縫紐財
深さ上やうさ川 薄になる
女のき車のやるうとなし
陳引く月と嵐になりゆれり

壺盧

鯛 鯡魚

大和布留

神名佐土布都神

亦名甕布都神

亦名布都御魂

烏鵲

此國鵲アル始ハ

推古帝六年

難波吉士磐金

新羅ヨリ帰リテ

雙鵲ヲ献ス難

波ノ杜ニ養食ハ云

みこの浦のさとの下にてさもあらき

古寺のてりよまちくる月

旅ゆく人のあやまちとかれり

狗さけし鍛のをしふ風流し

師走の神事 法の客まつ年忘

月まつ こゑ 霜 乃 鵲

隠れよのあらき 西師のうつ棒

高聴く月のまうけを宵の宵

揚子江もえてもうつる空く

うつらしくらゆる雲居のさとの月

降狩く麦 津つせ客

根よしとま近江のさち桜し

立房るる坊 乃 恵をてらく

のうく 隠居株まわりつく月の秋

敵為と初厚る心のるも忘し

佛ちくけ自ふなしつる

謡音調平家ニ

モトツケリ東山

慈照院殿ニ

始ル

海和尚

淮南子烏鵲
塡河成橋以
渡織女

札を掛くて揺らせまつりて
渡しつる月の光に人もなし
都の節は青きなみにこそ
鵲の橋より月の在る流れ
銀の河浪をとくもゆく
扇投げ掛けて一月影に
七夕とあまた行きも見ぬ
こよ一夜月あかく流れ合さ

京街名
越前加賀界
甲裳（カサスリ）

葉を露におきてこぼるる
霧より流るる月の光を
松葉に住む松虫を掃き出し
秋とても月数多く待つの道
かれの鳥は取り置る声聞く
峯より乃流を見る月かな
去りの名を見なく見えぬ
須手月の遠乃上に空

泥魚

菽乳

京紫野大徳寺大燈國師ヲ開祖トス

團子祭関東ノ田舎ニアルト云

鰍(カジカ)つかむ笛や吹く森
人呼る禪寺よの笛や月
捨られより　禪をなつかしき
豆腐くと荒鶯の咲く月夜く
秋の始終のうけもつなまき
大徳寺まてハツさき宵の月
團子祭秋交るとも　し空
東の果の花咲く中秋月細し

浪花

梵論師一云ボロヒジリ職人哥合ニ出或ハ虚無僧トモ云ハ非ナリ

東鑑鶴岡室前施藝ノ時左衛門尉祐經鼓(ツヽミ)畠山二郎重忠銅拍子タリ是今ノ小鼓ナルヘシ

秋の波ふ返る　川すゝき
月影に虚無の人ある劍さゝき
子寝捨より　向ふに　梵論
月見えうら書ふりゝまかりけさ哉
又泊れよ御ある名残の梵論く
月の雨　降りくとなふ　まの哉
まてな男秋　抑けたる更
同のさか月の出てさ日の中刻

凡古書ニ云ル
鼓ハ太鼓ナリ

鯀魚

婦人覆面ハ
貞享ノ比マデ
遺レリ

鼓の身子のいりこゝろもよし
鯀よみ陣の月見んさゝけて
蟲を祇れのそく　鷹秀
入月に驚す妻の赤蓋茶赤し
蝸の立ふなるとれ早貫きむえ
月夜まゐとむよ小覆面
宇打の太鼓　鬘を　替也す
京もなかさ花みそくらんと月見禿

豆マシイナスハ
漢名棗邑
又六ハ一休常ニ
過リシ酒店ノ
主人狂哥アリ

張継句
謡曲ニ入

いなかの印乃ゐる涼欄
青さぬ二すかなの鐘の月
豆腐よ灸ほうゐる出し風
又六かなの茶家新茶のゐる月
童頭とめれへの寺川えきり
猿丸さく渦名の鐘りを守出
ふところゐくらさく又茶の宿
短夜そくれ夜かつく帰よかり

鷸齒

旅まくら明かぬ明
親と子のよ志ても月
海の泡ま百集之ゝか
並ぶ月葉の繁さる隈なし
守郷かぬま武律とめる
都なきまでも出遠よひく月
流のてのんせる宿ゝのりにも
船のの津義たゝぬ月の雲

前見

久しふりなる富士の晴天
芒なる詠とさへる月の秋
ちりつもなりゝ人まくはく
はまやけく遊びのまよ尾さして
ちりくと露乃灯まちる
明たて月し消える露の上
田舎庵紙不理窓いとまる
吉読の姿つくて鳴る菊の月

矼

苦竹

河千鳥ハ漢名水喜鵲海千鳥ハ漢名呼潮

信濃善光寺ハ欽明帝時本田善光兄弟ノ願ニヨリテ造立ス

[illegible]川乃[illegible]
[illegible]の[illegible]月
[illegible]紅[illegible]
[illegible]の紅
[illegible]
[illegible]月の[illegible]
独を[illegible]
[illegible]

カマツカ今人雁来紅ニ混シ呼ヘリ枕草紙ニカリノクルハナト云ルハ雁来紅ニモ安カタシ

陸奥

[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]川[illegible]
[illegible]寸角[illegible]の月
[illegible]
紅の月掃除の[illegible]
[illegible]川[illegible]
頭の[illegible]

花の部

一 かつきり浦しの魚を賣て
えらふかく遠入する舟の家
今年ハ丁度七十八なる
まはしん売のの瑞掛ん
いくらの庭をいのくる細ととの
桑の木ふえくくえたなくくを
新の酒の瓶もあくし
むさけハ徳ぬ食とんのて

聖武帝時筑紫人新羅國ニ漂流シ疱毒ニ觸レ帰リテヨリ日本ニ流布ス
蝦夷陸奥ニ屬ス

ゆるく浅の志めき見る日和
たあくしくもをやるまで
硯の上にあこりときれき
柳九木の蒂のをしき木の井
面色しとく子との ぬ 塩 寝
疱瘡神を撫男まて送る末の室
草の病の芽る 費 猪
古川の木の木の芽を 梗と呼ん気

短褉

日本紀ニ端出之紀トハ縄

いつくき時に鍬指て出る
阜の松原上の古の一本指て
晩より出しける杉乃間に
あまた人の集ひしなを守ハ清
おとしの清やハさらぬ市人
古ふるく云む羽織に大以て
桶本賞手に清めすに半ば
為黒きを古の隣まて漂連のうち

山城鳥羽
西洞院京街名
鮒フナ一名鯽
豊臣大閤ノ時能奕呉松越後アリ老人雑話ニ見ユ或云八幡ノ人千利休弟子

滞留のうちに落乃漂文
上羽の古をえ画く西洞院
鮒の雑乃清ち鈍きを寄る
御向に蓮れハ良くも古の事
白をとのらけし縄をとうり
花松ら古折さしに古筆乃を
抗しうたそ古新を清めて
きのつまり不毎ある古さるを

棘鬣魚

此名誰トモ指カタシ季ナシト云ンタメ歟

来二句去花

夜鹿のゆりはらふ鶏く
出頭のこほりをもふるひまき
料理自慢に鯛乃まなまき
椽とゝあまた筆をそゝへん
扇の要をもらうても丸
式日にあつらへの袴の上
又きのふの粥を嫌それ
身又しくむこ嫌る出れいた

竹蟶

旅よめの[illegible]ニシ刀[illegible]
[illegible]
二[illegible]なりし[illegible]
このいゑりも[illegible]の[illegible]
茎を継なるのひる松杉
一なハえかりみさゝ[illegible]の[illegible]
驚かせハん信とける
新[illegible]へそうときつる[illegible]の[illegible]

紀事千壽万歳大和國窪田箸尾両村ヨリ出正月五日禁裏來云々今ノ万歳ハ皆ヨリ流レ千寿ヲ畧セルナルヘシ

よゝにへゆき 萬歳乃宿
家の内 十日もの気ハなん
せつくなりし 小倉の葺之
ひらきものやとえしなの家
名のみそのこる ほかの堀井戸
見るゝ人 逐あるも乃畧
ふる難 接ちすめ 雲々の傍
門 ... 春の ... なき

立春ヨリ八十八日頃霜降ヲ忘霜又別霜トミ

きゝなれしくまはらく 柔との
羅屑（ヨカクス）のやうに なる
激をけされハまして 云
ないそくなしから 猫まり雲
ちらちら 帶うらをまて 錦 流
小坂をも芝り草ぶん なびく
ふもとの小川 いい 大霜
ええりしくえんりも 跡さも 如き

牽牛花

弥生ハ草木弥生(イヤオヒ)スルナリ

僧ノ名浄蔵貴所アレド此ニハ不関

阿古やの野松より撫子
こまはる化粧かしこき末のわけ
一はしらと数点を前
山鳥ある事も長ゝき音(オト)驚し
ちくらしかく清らかく賽銭
弥生七日八日のたまの今日
浄蔵にへとかしなのかく
とのゝ娘の古風に京をうつしけり

孛(ハ)婁(セ)花供養ヲ多(タ)ドハセヲ用ヿアリ

江戸

止中りける給米乃賀
律僧のひとり御くあさりゑ
より合せんと摘る山之す
菴(カ)籔(セ)をさへあと清らきよ花井よ
錦の縫(コ)をよみ藪の日あしとゑ
根津若中あんらくの桃とより
机の下へ一のうくしす草餅
とくろんと様子あえ年九重し

カツキ被李ナリ左傳ニハ蒙衣ト云婦人面ヲオホフ本文アリ

恋の部

思の外に降乃小雪路引て
余所ならぬれハ約束を忘
とのいきぬとも花桜ちる
月一秋情恋う後をさし向ひ
想ひくら鯨く神合華の佐
かつきのかるひらしらくは
たまされくー一出あられさ美人か

大和

西施病テ眉ヲ顰ム鄰ノ醜婦ハ美ナリトシテ亦顰ニ倣ヘリ

正月初辰日水ヲ屋極ニ澆ギ火災ヲ壓スヲ辰祭ト云

小路うくれら辟まなる恋
新婦人も同し初辰ま水かけ
いらす出くる猊の手ま
瘧の熱を風ふけ冷め
西施さへ顰の顔まゆしく
床の目北門をとうか凶ふ頬し
筆まかくれく出坊去り算
うつくしきさらの刃猶をうしき

筑前

あふとのゝ鳥を揺るかと引傳て
麻疹猶ハまくらかりくと情なふく
宰府ふ拙りを書かる白操る
親王法しき枝の木かくし
白拙をきん仏と戴も筆のひ
うちあふく ゆくへの空を眺めり
ふくしうき 身の発よくゝ
きんく 彼堂のこのせる 酒まるを

源氏末摘花

陸奥

櫛ノ名湯津爪櫛ト神代紀ニ見エタリ

除夜月令廣義ニ除日除盡今歳以テ更ニ新ニカフル也トアリ

山城鞍馬

鼻赤く生れ付さるとのかひ
灯蓋も縄かけあるをくちお宿
傍よこをかる 相見のうつりぬ
信夫のことの 綵んころかな こゝと
櫛このみくく文かし古き綫をあもん
隨級の比翼を背よりあハせ
除夜よあれとも みきをくこのす
まれのくへ 霰降ゆく

淀川ニ源八渡アリ其辺ニ宮アリヤ不レ知

思ひきるかたひくゆかりたもとには
ぬきもまれし錦の露もこほれあり
唄く中に紅名ゆかり
きのふ恩しとゆふとのへになる
越路女にかりかひゆかし草枕
ある錦手織をかつき思ひ草
登のおとなく浚くく川、
みな波うらあかふ源八のわた
うつされて小松を籬も雲の嵜
小夜の瀬をとふかる嵩より
恋の味もつゆかならぬとのこに
雨の上手も庭も葉との
雪降く思ひ切るこぬくに
あとさき宮の程より帰くる
ふくりも同く旅る古君
ちりさえみれ種りなる笘

摂津

哲婦傾城ハ詩経ニ出後世転シテ花柳ノ称トス

京西郭

傾城のあつく和田の小松原
むらのゆかしく小濱しき
夢のよるさより旅ゝき京
和の切ゟを垂なくし々を

遠江

橘カウジ漢名ナリ今タチハナト云ハ漢名假橘

おさ（サカラ）織花ゝも艶女ハ隠さし色
淵淀のきりしく影る錦夕ニ
清しきのへしよ恨の玉垂
縫乃そん年　楢こと拆

えここへ現く鶯ふめせつゝき
きぬくをとまゝく家ふ意ぬもく
旅ぢ乃つるのあまる襟をと

提琴

欽明帝ノ時鞍部徳積ヲ以テ僧都トス

へ舞せよとと借部ゆせく旅
旅くきく袖を待ちも姫ゝ置く
あとまつこゝろの座ふ恋ありて
人の新乃綾しき春の夜
末縁背負うて帰る秋風

文鰩魚一名飛魚或作鯑

紀伊

下總

引火奴

町内のさんころとてき汐屋の妻

飛魚のうかもなうしんまくくく

色岁まる 物田乃 ろ 梢

物君よ 弟き 雲や たくらん

魚ゑとさし むくみるる 細き 村よ

えるらもふ川君ん 芸くる 能ろみ

胡らく文 庫る 床のうつり 色

日 菩の むふ 引川しる 附木と

山卧ハ役小角ヲ祖トス名山ヲ跋陟シ修験道ト唱フ

無縁寺國ニアリ

猪殃々（ムグラ）

男子歯ヲ染ル事鳥羽院ニ始ル黒歯ノ風外國ヨリ入来ル事可歎

肥後

思ふ 智を 垂 河なかさ 長刀

山伏は 形んの角 を形くれなき

法をのる なす とこうす 垂

菩のあとは よ 世 縁なの 読

志めや うま あしくえ とを 雑さく

吉をつの 墓く 派もかく され ま

春の 法 羽も ま なる 好 針

派 絶し くる 阿蘇 の 非 至

三平ニ満過便休ハ四休居士ノ句山谷集

俗説ニ叢朶（コンノエダ）ト書ハ視ノ意ト云ヘリ

三平（マルカホ）に笠あさ笠の昔めく
休み或は二万の一里うちつゞく
こ路さへ行かふ舟をうり行き
思ひ遣る千里の叢（シ）朶（タ）の深しき
もう恵む梅のにほひも秋の夕く
上京の尽く達乃時の紀
かゝる野に時の縁入るつゝのし
京まてきれる五月雨乃衣

甲斐

伊勢ニ一身田ハ一向宗下野流本山高田ハ下野地名

菜のむ色のとこもうつくしき
凄霽（セン）を見すたつそも折ふしも
いつの宿にこと葉行しひる
くさめ中のとく　なかまくれ尽
紀わける柱なくしとも遠し
うけ行しは雅内繪られ出で
云かたしる　ちとせ言田流
ちとされ冬乃との縁うき

古へ千手普賢ナド云遊女アリ

私語(サヽメコト)

獼猴

花をまけハ佛のめくみな於女かく
吉時の味をかゆり唄く
ひろうる事を思ふ傘
その翼ふる乃養ふ川まち
かられてなられとハ去れる傘さし
きうそくほとまる悪れさらすと
猿をなつゝくむさき独のあら
まれの下向のさゝみねころにわかる

六ス十二月云 四極(シハツ)ノ搏訛ナルヘシ

クヒナ前見

蚊母鳥

私猴をちくしふまくしたるとめちさ
雑めさをねとる師走のおふれて
羊雉を張ようちもさらめく
り猴のさそれ雑き百
帯とくわのめとして湊えと
手窮めつ妙仏るゐり袖まりよ
ふゑされ山戸をかさふ押しこむ
かすそこちくれくかつくかる鶯

新しからせる　飾りくる　女ども
君やらぬ雲のちぎれしあとゆかし
柊の花をよそにゆかる　袖
なつかしく忘られぬ　駕の下涼
みなもと原に　指をさしける　吉弥帯
すゞしさに　漆の銭の緒を　縒きけり
妹と涼のりし　栄の　杜若
さびしさに　浪くしむ　家

馬草

延宝ノ比歌舞妓上村吉弥アリ其比帯ノ結ヤウ吉弥結トテ流行セリ

踊り孫八仇をとらぬ前に
寳泉のたぬきも八座にこえて
引く声波にまじく聞ゆる
哀しみは急にあらせりしさ
急ぎ涙く垣ぞくに月さしく
後ろめのうちに人に逢ひぬる
友紀小姓に夢をとへらく
飼ひ業をせると門にて涼み

播磨

室遊女アル一久シ撰集抄ニ遊女美奈免哥アリ

人まち夜泊り湊す女とこと

涼しさに名所のこゑと吸ひこみ

三石とりしと云ひつゝくせことの

柄の方つまこそ色む女掛

うき時ハ世話の底なり浮つき

紫みの中にあと出の二のつくん

棧女の袖も室の子猫乃まま

料理場交る猟縄乃かゝり

三河

悪むれハ障子なく明るかまつとうち

うれしさの跡のいつへも名のよふま

妻とみるとも妹か年

矢矧の橋も通路乃こうち

乃らふ年まふとも悪人ねらし細基(モト)る

肥前

名古屋帯ハ丸ク組紐ヤウノモノニテ両ハシニフサアリ十替ヘキモノニアラス

名古屋帯三十日くふとも結ひて

まとそうてまはしうまく人

能くのへりまる綿の引ついし

摂津 眉ヲ画クト云フ我朝ハ神功皇后紀ニ始テ見ヘ新羅國ノコヲ画キテ美女ノ粧ノ如シトアリ

傘をかしまへハ好まゆし
一口もさくぬ菌を汁にしく
三千世界の娘たちさとのいひ
恋わくしくる 漁の音口
從来のならひに 眉を画(カキ)落し
風雅の姿になりしくる 物思ひ
悲もむかしに 柿とる上こゝ
涙のまゝれ 涼福 勝くし

一向宗ニノ御朝時ヲ重ク勤行トス

女房を小藪にとくしまかくし
西風さによひくるあとれ料理屑
限きいまそこのくしす 厨との
み思ひ縁に 繋て 綾に 染船時
たよりくに 纏之 忘れハ 両り律
思ひけり 書 はくされぬ 宗の 切
香の薪れ むさき 坂乃口
たらさ 絆くも 燃るあくれ

神子神ニ奉仕スル女同ク神子ト称スル中ニ神ヲ降シロコセ云一流國〻ニアリテ市ト云

巫女神ニ事ヘ宜祭リヲスルモチノリ和名抄カムナキト訓スレ𪜈他古書ノ中カムコカムコトアリテカムナキトハ未見

アラシコ アラセコノ縛セル歟

まさ神子はいのりし神をまつるとき
世の人々かくるゝ影のかけ
神あそひしてもまちかねて喜歩
頼千せらるゝ一ふのいりあさ
さまたの上とりなかの思ひも
梓ゆみ繭とすまのある
巫女とはいふもあやしこゝろ
傘も後まも横なり乃風

詩経ニ于嗟鳩兮無食桑葚ト アリテ女ノ耽ルヲイマシメタリ

外ノ井 儀式帳ニ於不葺御門ト出タル外宮ノ古典籍中載ルヲ見ルニ古ヘ門ノ横木ヲ雞栖ト云ルヲ故ニ遂ニ門ヲ称ノトリ井トスルナルヘシ唐土ニモ門中雞栖アル故和名抄ニ相合ス門雞栖也ト云ハ韋ニ合ニ近シ

摂津 福原ノ京ハ平

鳩なのしまてに鳩乃つかへ
鳩のまこそのまに雅くとせまん
乾くぬ眉にたえぬなみたり
傘見るまゝにかつよりあへる
人のよむえさし残くこつねん
とりゐのたつのみはそ井中そへ建
雞栖の名は女部のゆかる
花そのさかゆる福原乃京

相國所築今ノ兵庫
法印ハ法眼法橋ヲ歴テ昇ル僧位ナリ三代実録ニ貞観六年始テ定メラル
イナゴ種類アリ總名ハ螽
拭 正クハノゴフ

築島ところ〳〵の名にしおはゝへり
はりまなる女房のなにこそあり
よしあしきりにて耳をかしこき
草津の綿をむかしは一色
法印に座つかり雲に鈴鵬り
あらしと枕まで見いなさし
洞ぬくのめく所なきる 宵
第々の梅干しも 洞こそ清し

書紀天武帝朱鳥元年新羅進調貢上百餘種別献屏風上ヨリ屏風始テ此ニ見ユ

そゝきとゝに穀をまかれて鳥おとす
いつのまに思ひそめしや恋衣ありて
足軽るまるまで内あらき
年の暮りし 匂ひ嗅出す
こけつる屏風押入にかれなき
とさくさと出入の多き妻 和
横まこの手のれて思ふ様もあり
夜の梅わくしと 枕引寄る

魏ノ文帝與鍾繇ニ書九月九日月日並應陽數故曰重陽ト

香　天智帝藤原内大臣ノ家ニ幸シ玉ヒ黄金香炉ヲ賜ハリシ事書紀ニ見ユタリ香包ハ漢名香裹

閏月ハ気盈朔虚ノ餘分三年一閏五年再閏トナル　ウルフツキノ訓ハ日本紀閏月ト書ルニヨレリ

江戸ノ神田祭　祭神大己貴命　距本殿若干歩　祭平将門

ハラハ荊棘類

うさ宿のまとゐに菊を折そへて
重陽のことふき酒に集りて
おのおのなかく情むかふ髪
牡丹にぬひて扇る女房
拾へみたしき尾る香包
汗ふきくく凉む当世の小ぶかれ作り
続のふして疲(ツカヘ)持るゝる
豆梅く仕舞ふる閏月

紡績にやさしくせつせと励みくさ
むかしき風の体をなさとも
なまし嫁も月様のまさよみ
かくされぬ性の時の扇の搞
あくまかしくも牛に洗へてまく
本は後くし女弟を一人あゆみのあと
神田祭は九つられとましぬ
荊(ハラ)折く挨拶をいひふれ

桑甚

[illegible]社乃前に
いそかりし出ハかけぬく装をれて
[illegible]
つりそめと通りて[illegible]九十川
桑実(ツマミ)喰くふ　志い　居

梅室大人附句抜萃上巻終